

3

山下さんは、日本人で初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士ゆかわひできはかせについて書かれた伝記「湯川秀樹」を読み、最も心がひかれた一文とその一文を選んだ理由をまとめることにしました。次は、山下さんの【ノートの一部】です。これをよく読んで、あとの問いに答えましょう。

【ノートの一部】

湯川秀樹（一九〇七年～一九八一年）

物理学者。全てのものは非常に小さいつぶからできており、そのつぶに関する新しい考えを導き出した。その後、日本人で初めてノーベル賞を受賞し、戦後の日本に希望をもたらしした。



<p>心に残った行動や成しとげたこと</p>	<p>思ったこと</p>
<p>おさないころの湯川博士は、一人で黙々と積み木に熱中していた。長い時間、積み木を重ねたり組み合わせたりして、家や門を作っていた。</p>	<p>物事への熱中の仕方がすごい。わたしもパズルに熱中することがあるけれど、そんなに長くはできない。</p>
<p>A 小学校に入る前から高校のはじめのころまで書道を習っていた。最初は兄弟姉妹<small>しまい</small>の全員が習っていたが、兄たちはいつの間にかやめてしまった。だが、湯川博士は習い続け、様々な書き方を身につけた。</p>	<p>続けることは大変だけれど大切だ。わたしは水泳を習っている。やめたいと何度も思ったが、続けたことで、長く泳げるようになった。</p>

数学によって考えることの喜びを教えられた。むずかしい問題に出会うとファイトがわき、夢中になって解いた。夕食を知らせる母の声も耳に入らず解いていた。

わたしはむずかしい問題は、すぐにあきらめてしまう。湯川博士はなぜそこまで夢中になれるのだろう。

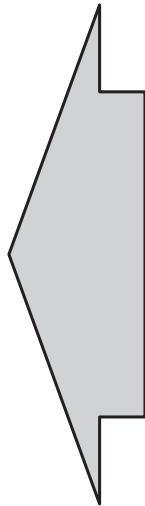
大学を卒業した後も引き続き大学に残り研究を続けたが、なかなか成果を出すことができなかった。研究の見通しが見つかず、苦しい日々が続いていた。

湯川博士も苦しいと思うときがあったということにおどろいた。

B 家族から外国への留学をすすめられた湯川博士は、自分の仕事を一つ仕上げた上でなければ、外国へ出かけたくなないと断った。自分の力で、やれるところまでやってみたい。何度失敗してもよいと考えた。

一度始めたことはなかなかやめないという湯川博士のことをよく表している。

C 最も心がひかれた一文とその理由



— 山下さんは、【ノートの一部】の **A** について、もっとくわしく知りたいことがあったので、湯川博士が自分のことを書いた本である【自伝「旅人」の一部】をさらに読みました。山下さんはどのようなことが知りたくて次の文章を読みましたか。その説明として最も適切なものを、あとの1から4までの中から一つ選んで、その番号を書きましよう。

【自伝「旅人」の一部】

(湯川秀樹『旅人 ある物理学者の回想』による。)

(湯川秀樹『旅人 ある物理学者の回想』による。)

- 1 湯川博士が自分自身をどのように思っていたのか。
- 2 湯川博士がどのような書き方を身につけたのか。
- 3 湯川博士がどのような研究に取り組んでいたのか。
- 4 湯川博士の兄弟姉妹はどのような様子だったのか。

二 山下さんは、最も心がひかれた一文として、**B**の中から「自分の力で、やれるところまでやってみたい。」を選びました。そして、【ノートの一部】の**C**を書くために、もう一度伝記「湯川秀樹」を読み返しています。次の【伝記「湯川秀樹」の一部】を読み、**C**の に入る内容を、あとの条件に合わせて書きましよう。

【伝記「湯川秀樹」の一部】

秀樹は、大学を卒業した後も引き続き大学に残って研究を続けたが、なかなか成果を出すことができなかった。そのころ世界では、秀樹が取り組んでいる研究の分野で新発見が相次いでいた。研究の見通しがつかず、秀樹にとって苦しい日々が続いていた。

昼夜を問わず、秀樹の頭の中には研究のことがあった。ふとんに入ってからも研究のことを考え、次々にうかんでくるアイデアをわすれないために、まくらもとにはノートを置くようにした。そして、アイデアを思いつくごとに電灯をつけてノートに書きこむようにし、ねばり強く考え続けていた。秀樹は、だれも知らない真実を探ろうとしていたのである。

C 最も心がひかれた一文とその理由

この言葉は、自分の仕事を一つ仕上げた上でなければ、外国へ出かけたくない、と留学の話を断ったときの湯川博士の言葉である。

湯川博士はおさないころから、積み木に熱中したり、書道にしんぼう強く取り組んだりと、一度始めたことを最後までやりとげようとしていた。また、

「自分の力で、
やれるところまで
やってみたい。」

これらのことから、「自分の力で、やれるところまでやってみたい。」という一文は、ねばり強く物事に取り組む湯川博士のことをよく表していると思った。

わたしは、勉強やスポーツに取り組んでいるとき、とちゅうであきらめてしまうことがある。これからは湯川博士のように、ねばり強く最後までやりとげるようにしていきたい。

